

“寝た子を起こす” ～大久保真紀さんのジャーナリスト魂

医学ジャーナリズム分野博士課程 市川衛（NHKディレクター）

講義中、気づいたことがあった。大久保真紀さんはFAPに対する肝臓移植に言及する際、「対症療法」という言葉を加えた。一度ならず二度、三度と、肝臓移植という言葉に言及するたびに「わざわざ」その言葉を強調した。

対症療法とは、たとえば風邪薬のように、根本的な原因の改善にはつながらないものの、その「症状」を緩和できる治療法に使われる言葉だ。「完全な問題解決にはつながらない」というニュアンスを強く含む。

しかし、FAPにおける肝臓移植は、アミロイドを生み出す最大の原因である肝臓を入れ替えるのだから、むしろ根本治療（病気の原因を改善する治療）に属するとも言えそうだ。なぜわざわざ大久保さんは、「対症療法」という言葉を強調したのだろうか？

講義の資料として配布された「患者の告白」を読んで合点がいった。そこには、脳死肝臓移植・生体肝臓移植が可能になったからこそ生まれた、新たな悩みや衝突の具体的な事例がいくつも挙げられていた。

費用の問題、それゆえに生まれる、治療を受けられるものと受けられないものの格差。移植時期が遅れたことによる、親と子の断絶。そして、他人である夫婦間の移植が生み出す、家族間の気持ちの擦れ違い……。肝臓移植によって救われる命は確かに増えたが、それは問題の根本解決では全くなく、新たな複雑な問題を生み出していた。何より心に残ったのは、志多田さんのものとして紹介された以下の言葉だった。

「医療技術が進歩しても、人間の心は進歩していかんけん、将来、昔の悲劇が繰り返されなければいいのだが…。私もそのころにはいないけんね」

“ここ10年ほど肝臓移植が増え、死を免れた患者たちは逆に本音を吐かなくなった。FAP患者がどのような最期を迎えるか、医師も看護師も知らない人が増えた。医療の現場で移植を受けられない患者は取り残されてしまうのではないか”

肝臓移植という夢の治療法が生まれ、難病患者の命が救われるようになった——。そう伝えたいほうが分かりやすいし、記事としては人目を引くのかもしれない。

「新治療法」「夢の根本治療」そうした言葉の中には、長年の問題が解決し、バラ色の未来が広がるようなニュアンスが含まれる。しかし現実には、肝臓移植が可能になったとしても、当事者が直面する問題はなくなっていない、むしろ複雑化している…そう考える志多田さんたちの気持ちを考えるからこそ大久保さんは、たとえ大学院の講義の場でさえも、常に「対症療法」という言葉を強調したのではないか。。。そう勝手に推測した。

（もちろん肝臓以外の臓器でもアミロイドは作られているので、そもそも根本治療ではない、という理由もあると思いますが）

大久保さんの講義の中には、随所にそのような「配慮」があった。

たとえば、“患者さんの気持ちもわかる、いや、わかるとは言えないんですけど・・・”というような言葉遣いだ。

きっと常に、問題が起きている現場に身を置き、その当事者と心を通わせるようにしているからこそ生まれた習慣なのだろう。それは医療を伝えるジャーナリストとして、欠かせない姿勢のように思えた。

以前、私が認知症に関する番組を制作したとき、コメントの中で「認知症の患者さん」という言葉を使った。それを見た先輩から、患者という言葉を使った姿勢を責められた。「人という言葉を使うように」「言葉には言霊がある。誤った言葉を使い続けるうち、それがレッテルとなり、差別を生み出す」と指摘された。

それ以来、認知症という存在を表現する際に、「病気」や「患者」という言葉を使わないよう心掛けた。上司からは「間違っていないのであれば、わかりやすい“患者”という言葉を使ったほうが良いのでは」と指摘されたこともあったが、なんとか押し通した。そうした訓練を通じていくうち、認知症という存在や、その当事者が抱える問題の深さについて、その一端でも理解できたような気がする。

講義の最後に、大久保さんが志加田さんの言葉として紹介された「本当のことを書けば文句も来る」というひとことが印象に残った。

当事者への配慮や、「気持ちを慮る」ということを突き詰めた場合、問題になるようなことを伝えない、ということが正しいという考え方も出てくる。大久保さんがFAPの当事者から言われた、「寝た子を起こすな」という言葉が示すように、あえて伝えない、自己規制の方向に走ってしまうかもしれない。

しかし大久保さんは、むしろ黙ることを選んだ当事者を説得し、記事や書籍を通じて問題を世に問うことを選んだ。そのことは、社会をより良い方向に変える可能性を持ちつつ、一方で知らずに当事者の気持ちを踏みにじったり、新たな差別を生み出したりするリスクも抱えている。だからこそ大久保さんは、大学院の講義や普段の会話に至るまで、常に「言葉」に細心の注意を払っているのだろう。

ひとことひとことに込められたジャーナリスト魂に敬服した。

お話を聞かせて下さり、本当にありがとうございました。今後ともご指導を頂ければと願っております。